

信仰は「神の真実」

[聖書] コヘレトの言葉 12章 1～14節

青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と言う年齢にならないうちに。

太陽が闇に変わらないうちに。月や星の光がうせないうちに。雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。

その日には 家を守る男も震え、力ある男も身を屈める。粉ひく女の数は減って行き、失われ 窓から眺める女の目はかすむ。通りでは門が閉ざされ、粉ひく音はやむ。鳥の声に起き上がっても、歌の節は低くなる。

人は高いところを恐れ、道にはおののきがある。アーモンドの花は咲き、いなごは重荷を負い アビヨナは実をつける。人は永遠の家へ去り、泣き手は町を巡る。

白銀の糸は断たれ、黄金の鉢は砕ける。泉のほとりに壺は割れ、井戸車は砕けて落ちる。

塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。

なんと空しいことか、とコヘレトは言う。すべては空しい、と。コヘレトは知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知識を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。

コヘレトは望ましい語句を探し求め、真理の言葉を忠実に記録しようとした。

賢者の言葉はすべて、突き棒や釘。ただひとりの牧者に由来し、収集家が編集しそれらよりもなお、わが子よ、心せよ。書物はいくら記してもきりが無い。学びすぎれば体が疲れる。

すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。

神は、善をも悪をも 一切の業を、隠れたこともすべて 裁きの座に引き出されるであろう。

[1] コヘレトの言葉の結論

今日で「コヘレトの言葉」を読む最後となります。12章ある「コヘレトの言葉」を通して読むと「へえ、こういう事が書かれている書物だったんだ」という発見がありますね。「すべてのわざには時がある」(3:1 口語訳)というような有名な言葉もこういう文脈の中にあっただと思いますし、全体のトーンとしては、信仰の喜びというより、「人生の空しさ」を見極めた人の言葉が羅列しているようにも思います。けれども、そういう中で、このコヘレト(集会の長)は神様を信じています。「死」というものでやがて人生は終わる。けれどもそういう虚無を抱

えながらも神様の存在を頼みとし、共同体のリーダーとして、「青春の日々にこそお前の創造主に心を留めよ」(12:1)と集まる人々に勧めています。

今日の箇所の中で3～6節の部分は少し謎めいていますが、「身を屈める」とか「目はかすむ」とか「白銀の糸は絶たれ、黄金の鉢は砕ける」などという描写は、一つの理解として、誰もが年を重ねていくという表現だろうと捉えられています。コヘレト自身と重ねて書いているのでしょう。そして人生の終わりを語ります。7節には「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」とあります。自分という存在の生涯の終わりを、ただの滅びや消滅とは考えてはいません。「私は神に帰るのだ」と言っています。しかし、またその後で「何と空しいことか…」とも言っています。どうもスッキリしないのです。…けれども或る意味からすると、とても正直に自分の心と向き合っているなあと思います。リアルです。

このコヘレトが依り頼んでいる神様は、14節にある「善をも悪をも…裁きの座に引き出される」神様です。13節では「神を畏れ、その戒めを守れ」とも言います。集会のリーダーとして、この言葉は間違っていないと思います。その通りだと思えます。きっと神様が最後は正しい裁きをして下さる、責任を取って下さる、その神様を信じて忍耐していこう、と。…ただ私などは、正論と思ながらもちよつとひるんでしまいます。どういうことかと言うと、私は自分の「信仰」は強くないと言うことを知っているからです。もし「信仰」というものが、私たち自身の熱心さや敬虔さが「はかり」となり、それに応じて神様が報われるのであるなら、私はとても神様の前に立てないだろう、脱落してしまうのではないかと思うのです。「いや、私は自信がありますよ」と言われますか？けれどもそれはおかしな言い方かもしれませんが「自分の信仰心」を信仰していないのでしょうか？

[2] カール・バルトの「信仰」理解

そこで、今日は一つのことを皆さんと分ち合いたいと思います。「信仰」とは何かということです。私たちは「信仰心」を持っていますが、それが何か「測れるもの」として考えていないかということです。自分の心の強さや状況によって、信仰も堅くなったり弱くなったりするものだと思っていないか、ということです。私自身も若い頃、それで悩んでいたことがありました。

けれども、FEBCの働きをする中である牧師先生の話から、カール・バルトという神学者のことを聞いて私は解放された経験を持ちました。このバルトという人は、20世紀を代表するスイス生れの牧師、神学者です。このバルトは「宗教との決別」ということを行いました。「宗教」とは自らが神に近づこうという行為であるが、キリスト教信仰とは、神が私たちに近づき、捕らえるという「神のわ

ざ」なのだと言います。「信仰」(ピステイス)という言葉は、人間の行為以上に「神の真実」ということであると強調しました(ロマ 3:22、ガラテヤ 2:20 等)。これに私の信仰は解放されたように思ったのです。自分がどうであろうが神様が私を捉えて下さる。信仰の根拠の逆転です。そのためにイエス・キリストは私たちの所に来て下さったのだ！ あのクリスマスの出来事ですね。神様が、私たちに近づいて下さったのです。私からは神様に近づけないからです。

[3] 『主ご自身』

もう一人、A・B・シンプソンという、19世紀から20世紀にかけての著名な伝道者の『主ご自身』というメッセージから少しご紹介したいと思います。これも目が覚められるような言葉なのです。少し長いですが、お聞きください。—「あなたは信仰によって癒されたのですね」と言ったある友人とのささやかな会話からA・B・シンプソンはこのように語っています。

「あなたは信仰によって癒されたのですね」と友人は私に言いました。それに対して私は、「いいえ、私はキリストによって癒されたのです」と答えました。違いが分かるでしょうか？ 実に大きな違いがあるのです。ある時、信仰さえも私とイエスとの間に割り込むかのように思われたことがありました。私は「信仰を働かせなければならぬ」と考え、信仰を得るために労苦しました。やっと手に入れたそれを今度は持ち続けるために全力を傾けました。そしてやっと信仰を手に入れたのですから、そこで私は「癒して下さい」と言いました。私は、私自身に、私自身の心に、私自身の信仰に頼っていたのです。私は、主の中にあるもののゆえにではなく、私の中にあるもののゆえに、私のために事を成して下さいと主に求めていました。そこで、主は悪魔に私の信仰を試すことを許されたのです。悪魔は吠え猛る獅子のように私の信仰を食い尽くしました。私は徹底的に打ち破られたため、自分に信仰があるとは思えませんでした。「自分には信仰がない」と私が思うようになるまで、信仰が取り去られることを神は許されました。その時神は、私に次のように優しく語っておられるようでした、**「私の子よ、心配することはありません、あなたには何もありません。しかし、私は完全な力であり、完全な愛であり、信仰であり、あなたのいのちです。私は祝福の備えであり、そして祝福でもあります。私は内なるすべてであり、外なるすべてであり、永遠にわたってすべてなのです」。** **大事なのはただ、「神の信仰」(マルコ 11:22 参照)を持つことです。「そして今、私が肉体にあって生きているのは、神の御子についての信仰によってではなく、「神の御子の信仰によって」である(ガラテヤ 2:20)。**まさにその通りです。あなたの信仰ではありません。命であれ何であれあなたがもともと自分の内に持っているものは何もないように、信仰も同じです。あなたには空虚さと空しさしかあ

りません。主にすべてを行ってもらうために、あなたは自分を開いて用意しなければなりません。あなたは、主からいのちを頂き、病気を癒して頂いたのと同じように、信仰をも頂き、そして単純に、「私は神の御子の信仰によって生きます」と言わなければなりません。私の信仰など何の価値もありません。もし誰かのために祈らなければならないなら、私はこう祈るでしょう、「主よ、ここに私がおります。私がこの人に対する祝福の水路になることをお望みでしたら、どうか私に必要なものをすべて私の中に息吹き込んで下さい」。必要なのはただキリストであり、キリストだけなのです。」—私はこれを読んで本当に嬉しく思っています。「信仰」のコペルニクスの転換です。

今日「招きの聖句」で読んで頂いた聖書箇所もそのようなことを語っていると思います。コリントの信徒への手紙二 4 章 18 節からでしたけれども、少し前からもう一度お読みします。私たちは「土の器」だという所からです。

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。

パウロは、私たちを支えるのは、私たち自身の力ではなく、私の信仰でもなく、イエス・キリストの命なのだ、と言っています。これは本当に大きな慰めではないでしょうか。この方に生かされているから、私たちは「四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」と言えるのです。十字架と復活の主がいつも、そして、この肉体の命が終わりを迎えた時も支えてくれるのです。これが神様の真実です。主に私自身を明け渡して、待降節を迎えたいと思います。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、ありがとうございます。私たちは神様を知りませんでしたけれども、あなたの方から私たちに近づいて下さり、「私こそあなたの神だ」と大きな愛を持って私たちを招いていて下さっています。感謝致します。今年もあとひと月でクリスマスを迎えます。コロナの中でのその日を迎えますが、あなたとの繋がりを切るものは何もありません。どうか、もう一度あなたの愛の中に私を捉えて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。